文学研究と文章

―アメリカ的表現を追って―

亀　井　俊　介

(1) 文学研究の衰退

立教英米文学会で何か話をするようにというお招きをいただいて、まことに光栄に存じます。ただ、この光栄の由来は、ひとえに私が年を取ったことにあります。それでこの際、まずちょっと私の文学研究の跡をふり返って見たいと思います。

私が大学を卒業して大学院に入った、つまり本格的に文学勉強の姿勢を固めたのは、昭和30年、1955年でした。それから外国留学などしていたので、はじめて大学教員になったのは、昭和38年、1963年でした。この前者から数えて今年で61年、後者から数えても53年たち、たっぷり半世紀以上たつわけです。私は英語の教員で、アメリカ文学や比較文学研究に従事したのですが、当時、これらの学問の発展に何の疑念も持っていませんでした。私は文学研究の発展を信じ、自分もその発展に参加したい、参加しうると思っていました。

ところが半世紀たった今、そういう楽観的な思いはすっかりなくなっています。もちろん自分の能力の限界を見きわめてきたことが最大の理由です。が、これらの学問、いやアカデミックな文学研究そのものが、今や衰退覆うべくもないのではなかろうか。早い話が、大学で文学を勉強・研究しようという人は

すっかり減ってしまいました。その結果、大学の文学部とか文学専攻課程とかは成り立ちにくくなり、学部や課程の廃止、改組が全国で行われてきています。

この原因について、近頃の世の中の風潮をあげることが一般的です。つまり世の中が目先の利益ばかり追求し、従って実際的な、役立つ学問ばかり重んじるようになったため、役に立たない学問の代表である文学研究は、軽んじられてきて当然だというわけです。それは大いにそうだと私も思います。が、もう一つ、文学研究者自身にも責任があるのではないか、と私には思えてなりません。文学研究から「文学」が事実上消えてしまって、文学の面白味とかけ離れた「研究」が一般的になってしまったのではないか。たとえば、文学作品や文学者がもたらす「感動」を真っ向から受け止め、それへの自分の「心」の反応を語ろうとする姿勢の文学研究は、いまはほとんど見かけません。何らかの批評理論を先行させ、それに合わせた議論に終始するものがほとんどです。学者仲間にだけ通用する jargon ばかりが行き交い、素朴な真情を吐露するような研究は馬鹿にされる傾きが強い。つまり文学研究が文学愛好者と無縁のものとなり、文学をよりよく理解し味わいたいという一般読書人の期待に応えるものではなくなったのです。これでは、文学研究が世の中から見放されても仕様がないと思います。

(2) 文学研究は「感動」から、感動は「文章」から

では文学研究を生き返らせるにはどうすればよいか。その方法は社会レベルや学界レベルなどでいろいろあるでしょうが、私の話は私自身が個人としてなるべくしようと努めていることに限ります。

一番の基本は、研究者もやはり文学に「感動」する心を取り戻すことでしょう。今どき「感動」などというと、19 世紀的もいいところだとあきれる人も多いでしょう。批評理論の多くは「感動」を否定することから成り立っているようです。「感動」のもとになる人間の「情」ほど当てにならぬものはないというわけでしょう。しかしその反対の「知」も、きわめていけばいたずらに何とか主義やらポスト何とか主義を積み重ねるだけで、極めて頼りない。私はそんな知的操作にふけるよりも、「文学」の原点に戻りたい。文学とは「情」に訴えるものであり、「感動」はそういう「情」の集約にほかなりません。もちろん「感動」にもいろいろあり、反発したり悲しんだりするのもその一部です。それらもひっくるめて、「感動」は文学研究の出発点となるべきものといえましょう。

いま一つ、文学研究をもっと「生きた」ものにする具体的なあり方として推し進めたいのは、「文章」を重んじることです。もちろん文学の「感動」は、作品に盛られた思想、作家があらわす徳性などからももたらされます。しかし文学作品を読むという最も基本的な営みに集中していえば、「感動」の直接的なもとは「文章」にあります。いうまでもなく、文学とは「文章」によって表現された芸術なのですから。ところが、理論本位の研究がはやり出してから一番なされなくなってきたのは、文学作品の「文章」を読むこと、「文章」を真っ向から受け止めて「読む」姿勢です。

実のところ、日本では文学と文章は長い間ほとんど同義語でした。そもそも「文学」という言葉自体が、語源的にはまず「文章博学」の意味だったとされます。その後、中国でも日本でも「文学」という言葉は、広義、狭義、さまざまに用いられてきましたが、日本近代文学の出発期にあっては、文学者たる者、時代にあてはまらなくなった古文（和文、漢文）から現代の言葉に表現を転換するために悪戦苦闘しなければなりませんでした。つまり文学的努力の重要な部分は文章表現の発明工夫にあったのです。坪内逍遥『小説神髄』（明治 18-19）でも、「文学」の語をおおむね文章術の意味で用いているようです。「言文一致」を目指し、「口語文」を発展させた作家たちがいかに苦心したかは、日本近代文学史で最も強調して語られるところでしょう。

また、本格的な文学研究の先駆けとなった夏目漱石の『文学論』（明治 40）は、東京帝国大学英文科における日本人によるはじめての講義をまとめたものですが、最初のうちは社会学や心理学といった当時の批評理論によって文学の本質を解明しようとしていたのがうまくいかず、途中で文章の分析、表現のあり方の究明に方向を転じ、画期的な内容となったものです。そして漱石自身もこの文章究明の仕事から作家たる意欲を高められ、『吾輩は猫である』（明治 38-40）を手始めとして自ら続々と文章の実験を試みるのです。漱石文学を論じるのに、思想的なことはあらゆる人が問題にしますが、彼の文章も同様に注目検討されなければならないと私は思います。

漱石以後も、真剣な文学者が自分の文章の発明・発展に全力を注ぎ続けてきたことは、申すまでもありません。

ところが、それほど重要な「文章」に即して文学作品を読み、理解し、味わうことを、近頃の文学研究者は二の次、三の次、いやほとんど無視してしまっているのではないでしょうか。日本文学なら、文章の微妙なところまである程度分かるような気がしますから、文学研究で文章を重んじる人もいないではな

い。が、外国文学となると、言葉のニュアンスが分かりにくいというので、文章を無視して理屈に走る。その方がはるかに楽なんです。しかしその結果、文学研究がますます「文学」から乖離し、文学作品を味わう楽しみを失うことになってきているような気がしてなりません。

(3) *Uncle Tom's Cabin* を読む

この辺りでアメリカ文学に目を向けてみましょう。アメリカの文学者も新しい国、新しい社会にふさわしい表現を探求してきたことはいうまでもありません。その様子の一端なりとも、文章に即して探ってみたい。まず誰でもご存知(のはず)の Harriet Beecher Stowe 作 *Uncle Tom's Cabin* を覗いてみることにします。奴隷制度を激しく糾弾して南北戦争の機運を高め、アメリカ文学史上、最も大きな社会的影響を持つ作品となったとされています。しかしまた「文学」としては、アメリカ文学史上稀に見るほどの激しい非難、軽蔑の対象になってきたともいえるように思います。

主人公の奴隷 Uncle Tom は敬虔なクリスチャンで、たいそう温順な人柄ですが、奴隷をやさしく扱う主人の手から離れ、深南部へ売られて行きます。途中で出会った天使のような少女 Eva が、New Orleans 近郊の大農園主である父 St. Clare を説得してくれたおかげで、その農園に買われて幸せな生活に入りますが、Eva が病気で死に、St. Clare も事故で死ぬと、また売られ、残酷な主人によって虐殺されることになる——といった筋立てで、全体的にメロドラマ調が目立ち、人物の描き方は類型的で、表現も古めかしさが支配する。言葉についていえば、当然、黒人の会話もたくさん出てくるわけですが、作者はアメリカ南部の生活体験がほとんどないので、いいかげんな俗語表現になっている——といったような批判がいっぱいなされてきています。

さらに言えば、1930 年代、40 年代からアメリカ文学界に歴然たる勢力となった黒人文学者たちは、この作品に強烈な嫌悪を示しました。Richard Wright は、Uncle Tom と違って白人への抵抗に走る黒人たちを描いた短篇集 *Uncle Tom's Children*(1938)によって、「抗議小説」の先駆けとなりました。そして James Baldwin は "Everybody's Protest Novel"(初出 1949、*Notes of a Native Son*〔1955〕所収)というエッセイで、"*Uncle Tom's Cabin* is a very bad novel" という有名な断案を下すのです。私たちはこの種の批評や評価を鵜呑みにし、ほとんど何の疑念も呈さないで来てしまいました。私もその一人であったわけです。

ただ私は、歴史的な意義があるとされるこの作品の「文章」を読まないで済ましていることに、長い間、忸怩たるものがありました。それである若い人たちとのアメリカ文学勉強会でこの作品を取り上げることを提案し、はじめて真剣に読んでみたのです。驚嘆しました。じっくり「文章」を追いながら読んでいくと、想像していたのとまったく違う「文学」的世界が展開するのです。そしてその「文学」性は、奴隷制度とか逃亡奴隷取締り法とかという時代的状況がすっかり変わっている今も、私にはまさにある種の「感動」をもって訴えてくるように思えるのです。いまその全部をお話しする余裕は到底ありませんが、私の印象に残ったところをほんの1、2抜き出してお話してみたいと思います。

まず最初に抜き出してみるのは、"The Reader Is Introduced to a Man of Humanity" と題された第1章の冒頭に近い次の一節です。

> "I would rather not sell him," said Mr. Shelby, thoughtfully; "The fact is, sir, I'm a humane man, and I hate to take the boy from his mother, sir."
>
> "Oh, you do? —La! yes, —something of that ar natur. I understand, perfectly. It is mighty onpleasant getting on with women, sometimes. I al'ays hates these yer screechin' screamin' times. They are *mighty* onpleasant; but, as I manages business, I generally avoids'em, sir. Now, what if you get the girl off for a day, or a week, or so; then the thing's done quietly, —all over before she comes home. Your wife might get her some ear-rings, or a new gown, or some such truck, to make up with her."

これはKentucky州のあるレストランで、2人の男が話し合っているところです。Mr. Shelbyというのは温和な紳士で、奴隷を丁寧に扱っている農園主のようです。ただ事業に失敗して、借金の支払いのために奴隷を売らなければならなくなってる。もう一人はHaleyといって、その奴隷を買いに来ている商人で、姿かたちは下品、しゃべる言葉もいささか卑俗です。彼はUncle Tomと、魅力的な女中Elizaを売らせようとしているのですが、ShelbyがElizaは妻が手離すまいと言うので、では代わりにElizaの子供を売ってほしいと迫ります。そこで引用のような会話になるのです。

Shelbyは自分を人道的な男だと言い立て、子供を母親から引き離すことに反対します。Haleyは何とかそれを説得しようとする。その努力が見事な表現になっているのです——「さようで？そりゃそうですとも。そういうのが自然っ

てもんで。まったく、よく分かります。おなごとうまくやっていくのは、時どきひどくしんどいこってす。わたしゃあ、あの泣いたりわめいたりってのが大嫌いでしてね。ほんとにしんどいこってす。が、わたしゃあビジネスをやってますんで、そういうのは何とか避けるんです。おなごを一日、いやあ一週間かそこら、よそへ出してごらんなさい。それでことは収まりまさあ――おなごが帰ってくる前にすべては結着です。奥さまからイヤリングとか、新しいガウンとか、そういった安物をやっていただければ、おなごはもうけろりとしてますよ。」

以下こういう調子で、この奴隷商人の論理と生活の知恵のようなものが、えんえんと饒舌な言葉――上品ぶっているけれども俗語まじりの粗野さあふれる言葉――によって見事に表現されていきます。2 人の対話は二つの相対する「生」の衝突と交錯の情景をなしており、その表現の力に驚嘆するほどです。

ここで問題は章のタイトルにいう “a Man of Humanity” です。温厚な紳士の Mr. Shelby は自ら “a humane man” を称しており、“a Man of Humanity” は彼を指すと取るのが順当でしょうが、Shelby は結局、自分の奴隷を守りえないどころか、守りえない自分を正当化して生きる情ない男です。それに対して奴隷商人の Haley は人間の表裏を知りつくし、そういう知恵を利用して、たくましく自分をさらけ出して生きる男で、作者はこちらをこそ “a Man of Humanity” と呼んでいるのでは？と思いたくなるほどです。いずれにしても Humanity とは奥深く複雑なものだということを作者はよくわきまえ、そういう「人間」の姿を会話の「文章」によって如実に表現しようとしているように見えます。この作品の登場人物が類型的だという批判は、文章をよく読めば、大幅に修正されることになると思います。

さて、New Orleans 近郊の農場主で、娘の Eva にせがまれて Uncle Tom を買い取った St. Clare は、知識人で、奴隷制の悪を十分に知り、それに反対の思いも抱きながら、南部社会にいたずらに波風を立てることを嫌い、世の中のことに対しノンシャランの姿勢で生きています。（この種の、奴隷制に複雑な対応をせざるをえない人間の有様を、作者はほかにも随所に描いています。）

St. Clare は、ひそかに愛している従姉妹の Miss Ophelia を Vermont から招いて一家の束ねをゆだねていますが、この人物の描き方も決して単純ではありません。彼女は New England lady らしく奴隷制に真向から反対ですが、その現実をどうすることもできず焦燥します。この Miss Ophelia の体験や見解を通して、奴隷制に乗っかった南部社会の生活、風俗、あるいは南部人の世界観

や人生観などが浮き出されてきて、興味津々です。

Miss Ophelia と、St. Clare 家の台所をあずかる奴隷女 Dinah との会話なども、まるで掛け合い漫才のように綴られて抱腹絶倒ものですが、ここでは “Topsy” と題された第 20 章から、やはり大いに笑いを誘いながら奴隷制の一端をうかがわせる一節を抜き出して見ましょう。

> “You must n’t answer me in that way, child; I’m not playing with you. Tell me where you were born, and who your father and mother were.”
>
> “Never was born,” reiterated the creature, more emphatically; “never had no father nor mother, nor nothin’. I was raised by a speculator, with lots of others....”
>
> ……
>
> “Topsy!” she would say, when at the end of all patience, “What does make you act so?”
>
> “Dunno, Missis, —I spects ’cause I’s so wicked!”
>
> “I don’t know anything what I shall do with you, Topsy.”
>
> “Law, Missis, you must whip me; my old Missis allers whipped me. I an’t used to workin’ unless I gets whipped.”
>
> “Why, Topsy, I don’t want to whip you. You can do well, if you’ve a mind to; what is the reason you won’t?”
>
> “Laws, Missis, I’s used to whippin’; I spects it’s good for me.”

Topsy というのは年齢 8 ～ 9 歳、St. Clare の奴隷の中でもとび抜けて醜く反抗的な少女で、Miss Ophelia は “heathenish”（異教的）と呼んで嫌っているのですが、St. Clare は彼女にこの子を与え、好きなように教育してごらんと言います。Miss Ophelia は初め嫌がりましたが、それもキリスト信徒の “a real missionary work” と心得て引き受けます。そこで彼女と Topsy の間で上に引用のようなやり取りが展開するのです。いろいろ聞いてもまともな返事がないので、あんたはどこで生まれたの、お父さんは、お母さんは？と Miss Ophelia が尋ねると、“Never was born, ... never had no father nor mother, nor nothin’” と答える。そして自分から “I’s so wicked!” とうそぶき、てんと恥じず、“... you must whip me; ... I an’t used to workin’ unless I get whipped” と言ってのける。会話はさらに続くのですが、どうやら Miss Ophelia の方が音をあげてしまう

様子です。

Connecticut の厳格なカルヴィニストの家に育ち、少女時代は Ohio に移ったけれども宗教的雰囲気中に成長した Mrs. Stowe の小説だから、むやみとお説教じみた内容だろうと思われがちですが、その文章をきっちり読んで見ると、あちこちでユーモアあふれる表現をしていることに気づきます。しかもさらに注目すべきは、New England lady の Miss Ophelia には Mrs. Stowe 自身の代理人の要素が大きいはずですが、作品は実のところ彼女の信仰心や道徳心の独善的な傾向を揶揄や諷刺の対象にもしていることです。つまりここでも作者の人間性の洞察は見事で、その洞察をコメディー仕立てにしていく表現力には感嘆させられる思いです。

この作品をさらに検討していけば、もっとさまざまな「文学」的特色を見いだすでしょう。たとえば白人をしのぐ知的能力を持つ奴隷の思考や行動とか、主人のセックス相手にされる女奴隷の感情やその運命とか、たいていの批評理論では型にはまった解釈しかされない問題が生きた形で取り上げられ、生きた「表現」を与えられているのです。

もちろん欠点も大きい。作者の関心の中心は「家庭」（home）にあったらしい。奴隷制の下では家族がばらばらにされることがあるので、この点を作者は、時にお涙頂戴シーンを描いたり、時にキリスト教信仰の問題と結びつけて議論をくりひろげたりと、執拗に取り上げます。私たちは文学的リアリズムの洗礼を受けていますので、こういう感傷性や宗教性にはなじめません。とくに万能 omniscient の作者が勝手にストーリーをひねくっていくやり方には笑い出したくもなるほどです。しかし、この時代の最大の政治的・社会的な問題であった奴隷制と真っ向から取り組み、その問題の渦中に生きている人間を多方面から丁寧に取り上げ、彼らの日常の会話をたっぷり織り込みながら、彼らの「生の姿」をこれほど丹念に生き生きと「表現」した小説はほかにあるでしょうか。私は知りません。

私は Mrs. Stowe を American Renaissance の重要な文学者の一人として評価し直したい思いに駆られます。American Renaissance は、デモクラシーの伸長と奴隷制問題の危機という二つの巨大な渦の中で、真剣な文学者たちが、「アメリカ」とは何か、そのアメリカに生きる「人間」はいかなるものか、を徹底的に考えたところから生まれたと私は思いますが、*Uncle Tom's Cabin* はまさにこの二つを基本的なテーマとして追究し、そのいろんな局面を豊かに「文章」化した出色の作品だと思うのです。

(4)「アメリカ的表現」を追って

さて以上で、私は文学研究においてもっと「文章」「表現」を重んじたいという思いをあれこれ述べてきましたが、じつはここまでが私の意図していた話の「序論」なんです。私の演題のサブタイトルになっている「アメリカ的表現を追って」というのが、実は「本論」のつもりだった。*Uncle Tom's Cabin* に出てくる黒人や下層白人の俗語は、よく言われるように authentic なものでなかったかもしれないが、もしそうだったとすれば、ああいう俗語をつくり出した Mrs. Stowe の文章力をこそ、むしろ逆に高く評価すべきでしょう、それほどにあの俗語文章は、奴隷制をめぐる人間的・社会的な諸問題の生きた「表現」となり、しかも宗教くさいセンチメンタル・ノベルとなるべき作品に、ユーモアという俗な人間くさい活気を与えました。そこでこういう、いわばアメリカの風土に根ざした vernacular 的表現の展開の跡をいささかなりと追ってみたいと思ったのです。しかし考えてみると、それを多少とも丁寧に論証しながら行うとすると、とても一夕の講演で語れるものではありません。それで羊頭狗肉になって申し訳ありませんが、このテーマのいわば構想だけ述べさせていただいて、いつかはちゃんと羊肉を売りますということでお許し願いたいと思います。

で、この話を、Mrs. Stowe 同様、American Renaissance につながる巨人だけれども、今や文学史などでほとんど無視されている James Russell Lowell のことから始めます。彼は同時代でたぶん最高の文芸批評家だった。もう一人、たぶん E. A. Poe だけが彼と並び立っていました。Poe は原理・原則をもって文学を論じた。*The Poetic Principle*(1848-49)はその頂点ですね。が、あれは「ポーの原理」The Poe-ic Principle というべきものであって、詩一般には通用しにくい原理だったのではないかと私は思います。Lowell の批評は、印象批評だとして理論家たちには馬鹿にされます。しかし彼の「印象」は、Poe の「原理」よりもずっと普遍性を持つのでないでしょうか。

彼の出世作、29 歳の青年が詩の形で、同時代の文学者を総点検してみせた *A Fable for Critics*（1848）をまずちょっと繙いてみます。たとえば冒頭、Emerson については "A Greek head on right Yankee shoulders, ..."、Poe については "Three fifths of him genius and two fifths sheer fudge," といったふうに、卓抜な「表現」が連なっていきます。が、ここでとくに注目していただきたいのは、Lowell 自身をうたった中の次の 2 行です。

The top of the hill he will ne'er come nigh reaching
Till he learns the distinction 'twixt singing and preaching.

Lowell は New England の知識人として自分の作品が preaching に傾きがちなこと、しかし文学界の高みに登るには singing も必要なことをよくわきまえていて、こういう表現をしたんでしょうね。いってみれば、文学には「知」だけでなく「情」も必要だというわけです。こういうことを言える Lowell の文学的見識の高さは、他を絶していたと私は思います。そして自らその singing をしたのが、すぐに続けて出した彼の代表作 *The Biglow Papers*（1848）だったと私は思います。折からの米墨戦争や、その背後にあった奴隷制への批判を、若く質朴な農夫 Hosea Biglow が「うたう」んですが、New England vernacular でうたう。素朴な言葉で「心」を直接的にあらわすことによって、ユーモアが生まれ、痛烈な諷刺が詩になるのです。いまその実例を読んでいる余裕がありませんが、Hosea の父 Ezekiel Biglow なる人物が現われ、*Boston Courier* の編集者にこの詩の成立事情を説明して、ぜひ掲載してほしいと要請する手紙は、部分的にでもここに紹介しておきたい。詩集の序文にもなっているものです。

Mister Eddyter: —Our Hosea wuz down to Boston last week, and he see a cruetin Sarjunt a struttin round as popler as a hen with 1 chicking, with 2 fellers a drummin and fifin arter him like all nater. the sarjunt he thout Hosea hedn't gut his i teeth cut cos he looked a kindo 's though he'd jest com down, so he cal'lated to hook him in, but Hosy woodn't take none o' his sarse for all he hed much as 20 Rooster's tales stuck onto his hat and eenamost enuf brass a bobbin up and down on his shoulders and figureed onto his coat and trousis, let alone wut nater hed sot in his featers, to make a 6 pounder out on.

途方もないスペリングと語法で、まるで判じ物ですが、息子の Hosea が Boston に出てみると、新兵募集で太鼓たたいて笛吹く連中に出会った。その中心人物の軍曹は Hosea を見て、まだ嘴の黄色い小倅と思い、カモにしようとしたが、Hosea はぜんぜん乗らなかった、というような話らしい。この軍曹の出で立ちは、「雄どり 20 羽のしっぽを帽子にさし込み、けばけばしい真ちゅう（勲章）を両肩にぴょこぴょこぶら下げ」といった調子でマンガ化されています。もちろん全体としてユーモアを狙った表現ですが、Stowe 夫人

の黒人たちの抱腹絶倒の英語に通じる、反体制的な土着精神の力を感じさせます。Lowell 自身は Cambridge Brahmin の中でもひときわ名門出身の人でしたが、こういう「アメリカ的表現」の果敢さにおいて、同年生まれ（1819 年）の Whitman に近づくところもあったと言えるように思います。

しかしこういう俗語的表現の面白味は Lowell の発見ではありません。それを早くから世に知らしめていた人に、同じ New England は Maine 州のジャーナリスト Seba Smith がいます。彼は 1830 年から自分の新聞 *Portland Courier* に、行商人で後に政治家に転じる Major Jack Downing なる人物が書いたという、やはり Yankee vernacular による「投書」を連載、折からの Jacksonian Democracy をからかったりして大人気を博しました。そして多くの模倣者を生むのです。Lowell もその一人であったかもしれません。

俗語使用によって地方性を押し出し、「アメリカ的表現」の面白味を強調するには、New England なんかよりもっとフロンティア的な地方の方が野性的な効果を生みやすいでしょう。南西部でそれをやって成功したのが、Georgia 州の法律家 Augustus Baldwin Longstreet でした。彼もまた自分の所有する新聞 *States Rights Sentinel*（『州権番人』）に、自分の知る人物たち（とくにプアホワイト）の口を借りて、Georgia の風俗、人物、出来事などを語ったのです。それを集めた *Georgia Scenes, Characters, and Incidents*（1835）は vernacular の面白さを横溢させて大評判となりました。こうして始まった南西部ユーモアはいかにもこれが「アメリカ」だと思わせる土俗性を押し出して、またもや多くの追随者を生みます。有名な Thomas B. Thorpe の “The Big Bear of Arkansas”（1841）は、その一例にほかなりません。私はこれについてもう 10 年以上前、日本フォークナー協会で話させていただきました。フォークナーの “The Bear” の先駆を思わせる、自然の神性をたたえた大熊の話なんですよ。ただし Thorpe の作品は、もっぱら俗語によるトールテールの面白味が目立ちます。

さてこういう「アメリカ的表現」の先に、「文学的コメディアン」は生まれたようです。その代表者となる Charles Farrar Browne は、やはり Maine 州の人ですが、長じて Ohio 州 Cleveland の新聞 *The Plain Dealer*（『率直な人』）の記者をしていた時、あの Lowell や Seba Smith を真似るかのようにして、文学界に登場するのです。つまり Artemus Ward という旅回りの興行師を作り出し、自らその人物になり切って、自分の新聞に「投書」するんです。次のような文章です。

Pitsburg, Jan. 27. 18&58.

The Plane Deeler:

Sir.

i write to no how about the show bisnes in Cleeveland i have a show consisting in part of a Calforny Bare two snakes tame foxies &c also wax works my wax works is hard to beat, all say they is life and nateral curiosities among my wax works is Our Saveyer Gen taylor and Docktor Webster in the ackt of killing Parkman. now mr. Editor scratch off few lines and tel me how is the show bisnes in your good city i shal have hanbils printed at your offis you scratch my back and i will scratch your back, also git up a grate blow in the paper about my show don't forgit the wax works.

yours truly,

ARTEMUS WARD

Pitsburg Penny

pS pitsburg is a 1 horse town. A. W.

一読して、あの *The Biglow Papers* の序文となった Biglow のお父さんの「投書」を思い起こさせます。句読点や大文字小文字の使い方からスペリングまで目茶苦茶で、文法も支離滅裂です（私は昔、戯れにこれを訳してみたことがあります。お暇のある方はめくってみてください。——亀井俊介『わがアメリカ文学誌』〔2007〕所収「アーティマス・ウォードの登場」）。この人物、恐ろしく無知な田舎者のようですが、新聞に自分のショーの宣伝を頼むことはきっちりと行い、「あんたわたしの背中かく、わたしあんたの背中かく」（魚心あれば水ごころ）と、まさに土着的卑俗な文章で抜け目ないヤンキー・スピリットを表現しているのです。

この「投書」を判読した読者は大笑いし、また大喜びしたんでしょうね。Artemus Ward なる人物はたいへんな評判を呼び、Browne はその Artemus Ward になりきった形で「投書」を続け、ついに *Artemus Ward, His Book*（1862）という本が出版されるまでになります。Bronwne はついにこの滑稽な英語を舞台で語って見せる——こうして「文学的コメディアン」が登場し、大いに流行し、果ては Mark Twain までその仲間に加わったことは、皆さんよくご存知の通りです。

ところで、しかし、この「文学的コメディアン」のユーモアは、すでに述べ

てきた人たちのそれと根本的に異なるところがありました。それは、同じように無知で朴訥な人物を装うのですが、彼らの英語は vernacular というよりもむしろ入念な言葉遊びであり、ナンセンスの面白味を見せるのが主であって、その背後に俗なる人たちの生活や感情が生きているわけではないのです。Lowell にも Mrs. Stowe にも、あるいは他の localists にも直接的あるいは間接的にあった政治的、社会的、文化的な主張のようなものはほとんどありません。

Mark Twain は早々と「文学的コメディアン」を卒業しましたが、作家となった後も vernacular 的表現の面白味を大いに活用しました。そして *Adventures of Huckleberry Finn*（1885）にいたって、語り手たる主人公の語りに vernacular の持つ土着的のびのび感、体制的権威から独立し、むしろそれに挑戦する解放感をにじみ出させ、彼を「アメリカ」に求められる「自由」の化身とすることに成功したといえるように思います。ずっと後年、Twain は口述によって自伝をあらわしました。手で書く文章よりも自分の思いを自由に表現できると思ったからです。ただその速記原稿を入念に校閲したようで、これを vernacular 文学とは呼びにくいです。が、しゃべり言葉の「自由」をもとにした独得の「文章」をなし、Mark Twain という巨大な作家の内と外とをダイナミックに表現していて、面白さ無類の「文学」となっています。この中に彼が自分の文学の秘密について述べる、次のような 1 節があります（*Autobiography of Mark Twain,* Vol. II、1906 年 7 月 31 日の項）。

> Humor must not *professedly* teach, it must not professedly preach; but it must do both if it would live forever. By forever, I mean thirty years....
>
> I have always preached. That is the reason that I have lasted thirty years. If the humor came of its own accord and uninvited, I have allowed it a place in my sermon, but I was not writing the sermon for the sake of the humor.

Twain が言うには、自分は Artemus Ward など 78 人のユーモリストとつき合ったが、みんないったんはもてはやされたけれども消滅してしまった。なぜか。彼らは「単なるユーモリスト」だった、「単に語法やスペリングを奇妙にして見せる」だけだったからだ。だが私は生き残った、と言って、引分の部分になるのです。生き残った理由は、私がいつも preach していたからだ、と彼は言います。

ここに preach というのは、もちろん New England の知識人の得意とした宗

教的説教でも道徳的教訓でもない。何か人生の真実、政治的・社会的な真情のようなものを表現することでしょう。もちろんTwainはユーモアを斥けるものではありません。もしそれが「おのずから」of its own accord生まれてくるものならば、重んじると言います。ここでhumorとは、どうやらLowellの言っていたsingingに相当するもののようです。「知」に対する「情」ですね。

Mark Twainもまたこの両者の合体を思い描いていたらしい。そしてそれを実現したのが、彼の「文章」であり「表現」であったと思います。

「文学」とはこういうものだと思います。作家が「生」をかけて、自分の思いと情を結集して表現するものですね。分かりきったことです。だったら単なる理論、理屈でこれを裁断するのでなく、その「文章」をきっちり読み、こちらの「生」でもって受け止め、味わう努力をしたいと私は思うのです。